

私は提案します

裾野市内中学校

清水さん

私が小学五年生のとき、下校中に友達と、先生が帰りの会で話してくれたことが話題になりました。それは、ゴミのポイ捨てが原因で、海の生き物が被害にあったり、町や都市が汚れて悪臭がしているという内容でした。私たちが、「やっぱりポイ捨てはよくないよね。」と口々に言っていた、その目の前にペットボトルが落ちていました。そしてそのペットボトルを、大きなゴミ袋を持った人おばさんが拾って袋に入れていました。

私たちは顔を見合わせました。その日はいつもより早く下校できた日でもあり、また、帰りの会での先生の話も思い出され、私たちは少しの時間でしたが、おばさんのお手伝いをすることにしました。

ゴミを拾っていて気づいたことがありました。それは、ふだんから歩いている道で、見慣れている景色なのに、道はただでなく花壇や植え込みの中からもたくさん、いろいろな種類のゴミが出てきたことです。ペットボトル、お弁当のパックやビニール袋、置かしの袋や箱、紙類、中には家庭ゴミがそのまま投げ捨てられたのかと思うもの

までありました。先生の話はどこか遠くの町の話ではなく、とても身近なことだったので。いつも歩いている道にこんなにゴミが落ちていることがショックでした。今思えば、ふだん見慣れているからこそいつもの光景として見逃してしまっていたのでしょう。

次の日の朝、登校の時、昨日ゴミ拾いをした所が少しだけきれいに見えました。「やってよかったね。うれしい！」と友達と言いました。それから私たちは時々、通学路のゴミ拾いをするようになりました。するとどんどん周囲がきれいになって、登下校中に友達や下級生から、「ここらへん、前よりきれいになったよね」という声を聞くようになりました。一緒にゴミ拾いをした友達と、「やったね！やっぱりゴミ拾いで正解だったね。これからも続けたい！」と喜び合いました。

その後、学校でゴミ問題について学ぶ機会がありました。そのとき、町の中だけでなく、海や川にポイ捨てする人がいたり、町のゴミが川から海に流れていったりしていると改めて知りました。そのゴミを魚やカメ、クジラなどが食べ物と勘違いして食べ、死んでしまうということを知って、胸が痛くなりました。ポイ捨てをしてもゴミは消えて亡くなるわけではなく、どこかに流れていって悪い影響を及ぼします。しかも、捨てた本人ではなくて、海の生き物や環境に被害を与えてし

まつのです。私は怒りを覚えました。ポイ捨てした人は、自分のそばからゴミが消えてすっきりするのかもしれませんが、それは本当に自分勝手で、そのゴミがどこで何に被害を与えているのかも知らない、考えないのでしょ。

日本のゴミ総排出量は、年間約四千六百六十七万トン、これは東京ドームの約百五十個分だそうです。また、ポイ捨てされているゴミの種類で何が多いかというと、たばこの吸い殻、空き缶、紙コップだそうです。何かたたくさんのものを表現するとき、「東京ドーム〇個分」が代名詞のようになっていますが、そのいい回しになれてはいけないと思います。本当にあの大きいドーム満杯のゴミが百五十も並ぶことを想像してみてください。そのゴミは簡単には消えません。燃やしても、埋めても、海に流しても、絶対にその悪影響が残ります。

SDGsの目標「6安全な水とトイレを世界中に」「11住み続けられるまちづくりを」「12つくる責任・つかう責任」「13気候変動に具体的な対策を」「14海の豊かさを守ろう」「15陸の豊かさを守ろう」、これらの全ての目標にゴミの問題は関わっています。SDGsの目標は全部で十七個。そのうちの六個に関わっているのですから、これは本当に世界じゅうで取り組んでいかなければならない問題です。ゴミだらけ、ポイ捨てだらけでは海の豊かさも陸の豊かさも守れませ

ん。住み続けられるまちもつくれません。安全な水がなければ生きることできません。だから、ゴミを東京ドームに換算するような量を出さないように、物を作る際や購入する時にはその物が最後にどうなるのかまでを考えるべきなのです。それから、「具体的な対策」は、みんながすぐ簡単に取り組めることとして、私は町内や通勤・通学路のゴミ拾いの習慣化、制度化を提案します。私も実際にゴミ拾いをしてみて、ゴミに対して意識が高くなりました。きれいになると嬉しい、きれいに保っておきたいという気持ちになります。何気なく使ったり通ったりしているところも、自分と同じようにきれいにしてくれている人の存在で成り立っていると思ったら、無責任に汚すこともしなくなるのではないのでしょうか。ゴミの問題は世界の問題ではありませんが、しかしこのように小さな個人の具体的な働きで解決していくべき問題だと、私は思います。